

# ようこそ ヴァイマルへ

## 鎌 田 道 生

誰にとっても聖地なる場所がある。文学者にとっては、作家との関わりが聖なる場所となる。筆者には聖地は三つある。

まずリュベックが第一の聖地である。1972年の7月、初めてのドイツ滞在時、最初に訪れたのがトーマス・マン（Thomas Mann 1875-1955）生誕の町、後にミュンヘンで本格的な作家活動に入るまで過ごした町、七つの教会の聳えるハンザ自由都市リュベックだった。

北極圏上空を飛び、ルフトハンザ航空がハンブルクのフルスビュッテル空港に降り立つと翌日、町へ直行した。旧市街の外にある駅からホルステン門をくぐって旧市街に入った時、筆者は『ブッデンブローク家の人々』や『トニオ・クレーガー』で思い描いていた地に着いたのだ、としばし感慨に耽った。町を歩いているうちに、作品の箇所と眺める視線が交錯し、これは良き出発点だと改めて思った。

第二の聖地はウィーンだった。マンの作品から離れ、モデルネの作家、エッセイズムの大家、ローベルト・ムージル（1880—1942）の未完の大作『特性のない男』に研究対象を移した事情があった。作品の舞台は旧ハプスブルク王朝の古都ウィーンであった。それまで旅の通りすがりに宿泊したことがあったが、1999年の4月から9月末まで研究滞在した。同じドイツ語圏にありながら、まったくと言って良いほどの異質な文化、多様性に富んだ文化、誇り高い国民性を知り得たことは大なる収穫であった。

## ヴァイマル

第三の聖地がヴァイマルである。筆者は、年を取ればゲーテを読もうと決めていた。特に『ファウスト』には関心があった。50歳になった時に職場の同僚、教育哲学専攻の友と『ファウスト』を読み始めた。テキストは評判の良かったアルテミス記念版を選んだ。注釈書として、レクラム文庫版、や高橋義孝『ファウスト集注』を使った。互いに年齢的に学内、学外の仕事に悩殺され、病気にもなり、途切れ途切れに読書は続き、定年の年に読み終えた。その後、関西学院大学が主催した市民大学講座で知り合った人々の要請に応じて、柴田翔さんの白水社から出された対訳本や訳本を使用して読書会を継続した。そしてゲーテの巨人性、善悪の彼岸に立つ人物の凄さを知るに至った。

### 若きゲーテ、ヴァイマルに定住する。

ゲーテ (Goethe 1749-1832 年) やシラー (Schiller 1759-1805 年) が、ドイツ古典主義というアイデアのもとに住んだヴァイマルは、ゲルマニストにとって聖地巡礼の中心地だった。

ゲーテは、1775年11月、年下の若いヴァイマル公カール・アウグストの招聘に応じてこの町、ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ公国の街に移住した。すでに小説『若きヴェルターへの悩み』によって時代の寵児となっていた彼は、まずは賓客として、やがてアウグストを助ける行政官、3人の枢密顧問官である大臣となった。

当時公国は、人口約10万、ヴァイマルは約6千人の小都市だった。しかし、盟友シラーのほかにもゲーテに影響を与えた言語学者ヘルダーや、詩人ヴィーランドなどが住んでいた。19世紀後半に至っても、音楽家のリスト、リヒャルト・シュトラウス、また狂気となった晩年のニーチェも住み、文化の都としての街の名声を高めた。

その影響もあり、第一次大戦後の混乱のさなか、1918年、新憲法制定の国民会議がこの地で開催され、「ヴァイマル共和国」、「ヴァイマル憲法」と

いう名称が定着した。この時代の文化の発信地となったベルリンは、1920年台には、ニューヨークとならぶ世界文化の中心都市となった。

## 二度目のワイマル

初めてワイマルを訪れたのは、1992年の旧東独地区見学の際だった。その時は、慌ただしくゲーテ関係の名所を駆け回るように見学しただけであった。二度目は、2004年の初秋、ちょうど世界文化遺産の「アンナ・アマールリア図書館」の一部が焼失した直後のことだった。アマールリアは、アウグスト公の妃であり、その図書館は、ロココ建築の広間を持つドイツ最初の公共図書館、蔵書数は85万冊だった。

ヴァイマル駅からバスで街の中心部に向かい、宿泊案内所でペンション「リスト」を紹介してもらった。かのハンガリー出身の音楽家の名を冠した宿、自炊も可能な宿だった。

### ゲーテ・ハウスにて 質素な精神

旧市内に向かった。まずは「ゲーテハウス」、現在は博物館となっている建物へ入る。アウグスト公がゲーテに寄贈した3階建ての邸宅、黄色を基調にした外壁、内部は彼の生活空間だった。多大な芸術・学術書、そしてまた彼自身の作品、その原稿が展示されている。

建物が公開されたのは、彼の孫、ヴァルターが1885年に亡くなった後のことである。目に留まった生活用品は質素だった。書齋は剥き出しの床、仕事机も装飾なしの板、脚も腰掛けの椅子も素朴きわまるもの、ここから畢生の作、『ファウスト』が誕生したのである。近くのシラー記念館の装飾に富んだ室内の仕様に比べれば格段の差があった。物書きに必要なのは簡素な環境であるという哲学が、彼にはあったに違いない。

上階の入り口には、「サルヴェ *salve*」という言葉が記されていた。

ようこそ、というラテン語由来のイタリア語である。またアウグスト公より最初に提供されたイルム河沿いの「ゲーテ園亭」もゲーテ自身が設計を依頼したもの、内部空間も博物館と同様、彼の考えが浸透していた。

博物館の一角、地階には、彼が遠出に用いた馬車が展示されていた。イタリア紀行の際にも、彼はカルロヴィ・ヴァリ（旧カールスバート）から遁走し、郵便馬車を乗り継ぎながらブレンナー峠を越え、「南の国、レモンの花咲くところ」へ入ったのだった。

### ホテル「象亭」 トーマス・マンのゲーテまねび

旧市街の広場、あのゲーテとシラーが手を携えて立つ彫像のある国民劇場の傍に、高級ホテル「象亭」Hotel zum Elefantenがある。2階のヴェランダにトーマス・マンの銅像が立っている。彼の小説『ヴァイマルのロッテ』（1939年）を記念して造られた彫像である。

ゲーテの若き自画像であったヴェルターが熱愛したロッテ、そのモデルだったシャルロッテ・ケストナーが、1816年に枢密顧問官ゲーテを訪ねて来た。それをマンが作品に取り上げた。

だが彼は彼女を冷たく迎える。彼女への言及は形ばかり、若年の疾風怒涛の熱気が再来することを嫌ったのだろうか。

マンは、ロッテを登場させない。ゲーテの振幅の激しい感情、神と悪魔の併存する晩年の生活を、ヴァイマルを舞台に描く。とりわけ筆者が引き込まれたのは、第7章、シラーとの内心の確執を夢を使い、心理分析の手法を用いて語る名人芸と言える箇所である。

そこには、マン自身のゲーテ「まねび」、模倣が二重写しとなる。マンはゲーテを市民時代（ブルジョワ社会）の代表者とみなす。また他方で、ヴァイマル文化からナチス時代、そして外国亡命へと向かった自分の運命と、ゲーテがみずから求めて逼塞した小都市ヴァイマルの状況を重ねる。

マンには、亡命先であれ、自己がいる地にこそドイツ文化がある、自分こそゲーテに体现されたドイツ文化の継承者であるという自負心があった。ヴァイマルこそドイツ文化そのものだとゲーテ自身も思っていたのであろうと、マンは推測したはずだ。10数編余りのゲーテ論はその証しだと言いたいのである。

とりわけ、ドイツの敗戦直前に行われた講演「ドイツとドイツ人」の中での、ゲーテの辿った道、ルターではなく、エラスムスの人道主義的精神への帰依を説く一説は、強く読者の心を打つ。少々深入りして、ゲーテの人文主義について考察したい。

### 自然の中に神は存在する

『若きヴェルターの悩み』の冒頭、主人公が友に、手紙で語りかける箇所がある。小川のほとり、叢に横たわり、小さな動物の動きを感じながら、彼は記す。「ぼくは、われわれを自分の姿に似せて創った神の存在を感じる。」

これが汎神論である。自然の中に神が宿るという宗教の根底にある感情である。やがて自然科学が産業革命を促進し、魂の住む領域を狭め、ニーチェが登場し、キリスト教の倫理観を内在的に否定し、神の存在を否定する。ゲーテは最後の汎神論者だった。

### 公孫樹の葉

街のあちこちを見て回った後、お土産にゲーテの肖像のレプリカ、そして公孫樹 (gingo biloba) の葉を刷り込んだマグカップを買った。レプリカは、独文研究室の棚の一角に鎮座している。

公孫樹は、ゲーテ好みの、東洋からやって来た植物である。『西東詩集』の「ズライカの書」に、「その葉は一にして二重」とある。それは、年配の詩人ハーテムの、若い恋人ズライカへの思いの象徴である。ズライカには若い恋人ユセフがいる。ゲーテ自身の、若い人妻にして女優のマリアンネ・ヴィレマーへの恋が重ねられている。ヴィレマーにも夫がいる。ハーテムも、ゲーテも苦悩から逃れようとする。それが「二重」という表現に譬えられる。

「一にして全」(Eins und Alles) という詩もある。個我を世界の自我にまで高めようとする観念、アイデアの比喩でもあろうか。それはまた、恋愛から、その成就の直前に逃亡する名人であった彼自身の、したたかな経験を反

映したものであろうか。

その後、数冊の書と絵葉書を求め、行きずりのレストランに飛び込んだ。疲れた時は、肉料理に限る。パンパンと肉をたたきつける音が聞こえた。ウィンナーシュニツェルを注文、乾ききった喉をビールで潤し、一服した。

## 人文主義者 ゲーテ

たとえば、あなたはヒューマニストですね、と言われた場合、大半の人は、その言葉を褒め言葉と受け止めるでしょう。この単語は、元来、ルネッサンス期の人文主義者や、古代ギリシア・ローマの研究者を指した。ラテン語の「ホモ homo 人間、ヒト」の形容詞、humanus に由来し、「人間の、人間的な」という意味を持つ。

人文主義は、西洋中世のカトリック教会の権威主義から自由になり、人間性の尊厳を確立しようとする運動であった。イタリアのペトルカ、ボッカッチオ、ピコ・デラ・ミランドラ、そしてイギリスのトマス・モア、そしてその親友、オランダのロッテルダムのエラスムスなどの名前が挙げられる。

特にエラスムスは、著述がラテン語だったゆえに、学者以外の階層には知られていなかった。だが彼は、その著作『痴愚神礼賛』や『格言集』など、古代ギリシア・ローマ文化に関する学識によって、凝固した中世のスコラ哲学やローマ教会を批判した。彼はそれによって人文主義の頂点に立ち、知遇を得ようとする知識人が後を絶たなかった。その他、人文主義者としては、フランスのラブレー、ドイツのフッテンなどが挙げられる。

筆者は、杳掛良彦の『痴愚神礼賛』（ラテン語原典訳）や『エラスムス人文主義の王者』（岩波現代全書）、またフランス文学者の渡辺一夫のフランス語訳からの『痴愚神礼賛』を読み、エラスムスの仕事を知った。

人文主義の流れは、ドイツに限れば、18世紀末から19世紀初頭にかけてのゲーテやシラーたちの古典主義文学がその中核を成した。

彼らの精神は、キリスト教の布教以前の古代ギリシア・ローマを理想の地

とみなし、イタリア・ルネッサンスの理念を継承した運動であった。

ヴァイマルを中心に展開されたその潮流は、20世紀のヴァイマル文化へと継承されていった。その代表者がトーマス・マンである。

この人文主義の濫觴は、イタリアで生まれた大学制度に辿れる。西洋最初の大学（universitas= 共同体）は、イタリアのボローニア大学だった。専門科目は、神学、法学、医学であり、その下位に哲学があった。ミネルヴァ書房の『ドイツ文化の55のキーワード』（宮田・畠山・濱中 編）から借用すれば、哲学はさらに文法、論理学、修辞学、代数学、幾何学、音楽、天文学の7科目に分かれていたとのこと。

それが良く分かる文言をゲーテの『ファウスト』から引用してみたい。『ファウスト』の悲劇第一部、「夜」は、ファウストの嘆きをもって始まる。

ああ 哲学はもちろん  
法学に医学も  
残念なことに神学までも  
胸を焦がして究めたものの  
今ここにいる俺は 哀れな阿呆  
昔とちっとも変らぬ阿呆だ！

この後、ファウストは、「世界をその深奥で束ねているものは何か」を知るために、煩悶の果て、聖書のヨハネ福音書の「はじめにロゴスありき」の文言を「はじめに行為ありき！」と解釈し直す。そして悪魔メフィーストと契約し、魂を売り、第一部の地上でのマルガレーテ（通称グレートヒェン）との愛の世界に突き進む。むろん「行為」が無ければ、物語は始まらない。とはいえ、なんと尊大な肥大した自我だろう。

ところで、哲学の7科目については、作者ゲーテの人文主義の総体、その陰と陽とが皮肉交じりに顕れた場面がある。メフィーストがファウスト博士の代役を務め、各科目の効用について漫談する箇所である。今や大学者となったファウスト博士のガウンを纏ったメフィーストが弁舌を振るう。1968

行以下である。

彼の目論見は、ファウスト博士の「理性と知識」の仮面を剥がし、悪魔と契約を結ばせ、博士の魂を手中に収めることである。この場では、メフィーストに成り代わった作者自身が、自由奔放に警句を振りまく。この場は、博士がメフィーストに屈服する前段階である。

その後で新入生の学生が登場する。メフィーストの講義が始まる。大学者に成りたい若者を取るべき科目について語る。まずは論法の数々を身に着ける論理学を学び、抽象、還元、分解することを学べと。ついで「人間の脳では掴めぬことも 深遠にとらえる学問」である形而上学を究めと助言する。

その後に「専門」を選べと忠告する。この三科目についてのメフィーストの批評は辛辣を極める。それぞれの影の部分強調する。悪魔の手下が本領を発揮する場である。

法学については、「世代を重ねるうちに、理性も不合理に代わり、慈善も難儀なものとなる」と。神学については、「神学という学問は、とかく邪道へ人を導き、多くの危険な毒が隠されており、その上、薬と見分けがつかないのだ」と、続く。ここでは、すべての物事が二面性を持つ、つまり相対主義に陥らざるを得ない人間の知性の限界が示される。

読者の微苦笑を誘うのは、医学について語るメフィーストの、彼の人間侮蔑のセリフであろう。メフィーストが悪魔の正体を顕す。患者を看る際には、とりわけご婦人方の心を掴め、と言って「女どもの苦情は絶え間がないが…ひとつの急所でみな治る」と放言する。筆者はすべてのセリフを記すことを控えたい。男性中心主義の最たる発言が続く。フェミニズムの論者なら、怒りを爆発させるところであろう。

そして最後にメフィースト＝ゲートルは、言う。「すべての理論は、親愛なる君、灰色だ。そして緑色をしているのは、生の黄金の樹なのだ。Grau,teurer Freund,ist alle Theorie, Und grün des Lebens goldner Baum」

大学生は感服し、メフィーストに記念の言葉を記して欲しいと願う。メフィーストは記す。「汝ラ神ノ如クナリテ 善悪ノ区別ヲ知ニ至ラン Eritis sicut

Deus, scientes bonum et malum」と書く。学生は退場する。

これは旧約聖書に登場する場面、楽園を追放されたアダムとエヴァ、原罪を負うに至った男女を描く場面である。メフィーストは、大学者の威厳を保つ振りをし、中世の学者の言語であるラテン語を用いる。作者ゲーテの巧妙にして狡猾なセリフ、芝居なら大向うを唸らせる見得の切り方である！

### トーマス・マンの人文主義 『魔の山』 (Der Zauberberg)

1924年に発表されたマンの『魔の山』は、20世紀の若者が学ぶ人文主義のパロディである。主人公ハンス・カストルプは、学生ではなく、大学出の工学士である。しかも彼が学ぶ空間は、スイスのダヴォスのサナトリウムである。従弟の兵士が、当時の「死の病」とされた結核の療養のために入院した病院を訪ね、自分もまた結核に罹り、7年余り過ごすことになる。

#### 教養小説 (Bildungsroman)

贅を尽くした療養所は、生と死と恋愛遊戯の繰り返される魔法の空間である。いわゆる教養小説、そこに生きるうちに主人公が成長しつつ人生の高みに到達する、形を取っている。

真面目な学生となった工学士は、先生・師匠格の医師たちから最新医学、医術を学ぶ一方、同じ患者であるイタリア人の人文主義者セテムブリーニ、マルキストで革命を目論むイエズス会士ナフタ、オランダの大富豪の、インドネシアに大農園を持つペーペルコルン、などとの付き合いを契機に、猛然と勉強を始める。書物を買込み、先生方から吸収した知識を確認する。医学、精神分析、生物学、化学、天文学、宗教、哲学など、中世の大学の専門の3科目、それに哲学の7科目に該当する学問、すなわち百科事典的知識を獲得するのである。

おまけにハンスは、キリギス出身のマダム・ショーシャーとの恋愛遊戯に耽溺する。彼らはフランス語で会話を行う。外国語でしゃべることは、羞恥心を薄れさせる。ハンスは、生理学、医学の知識を駆使して恋を成就する。その顛末が彼の魔の山逗留を促進したのだった。彼は第一次世界大戦の勃発

と共に、下山し一兵卒として出征し、シューベルトの「菩提樹」を口ずさみながら、霧の中へ消えて行く。

### トーマス・マンの変容

この小説はワイマル共和国文化を代表する作品であると同時に、20世紀前半のヨーロッパが生んだ優れた作品となった。時代の潮流を知る知識人になるには必読とされた時期があった。というのも、その内容が第一次大戦直前の西欧社会の様相を総括しているからである。それと同時に、マン自身が安住していた小さな世界、言ってみれば19世紀的な大ブルジョワの世界から脱出する要因ともなった。

時代がオルテガ・イ・ガセットのいう「大衆の反逆」の時代に突入り、マン自身、闘う民主主義者に変容したことを証明する作品となったからである。少し立ち入ってみたい。

第一次大戦後にソヴィエト連邦をはじめとする社会主義国家が生まれ、従来からの英国のような立憲君主国、ドイツ共和国（ワイマル共和国）やフランス共和国、アメリカ合衆国などと共生し始める。

こうした状況の中で大衆が選挙権を獲得し政治を動かす勢力となった。オルテガの書は、この時代を生きる2種類の人間について、次のように分類する。（寺田和夫 訳『大衆の反逆』中公クラシックス 2008年4版参照）原書は1930年に発行された。ファシズム前夜の年である。

「一つは、自分に多くを要求し、自分の上に困難と義務を背負いこむ人であり、他は自分になんら特別な要求をしない人である」最初の人たちは、ノブレス・オブリージュ（noblesse oblige）の精神の伝承者だろう。時代の代表者たる自負を持った人たちである。

「他」は「大衆」である。大衆とは（スペイン語 las masses 複数形）、他人と自分が同一であると感じ、かえっていい気持ちになるような人々である、とオルテガは言う。現代風に言えば、同調を好む人たちであろうか。西欧では、まさしくムツソーニヤヒトラー、スターリンが登場し、群衆が彼らの体制を支えた時代が始まった。そして少数のエリートたちの個人主義が

力を失い、第二次大戦へと向かう危機の時代となった。

トーマス・マンは、こうした状況の中でデモクラシーの支持者へと変容し、1929年には、1901年に書いた『ブッデンブローク家の人々』を対象にノーベル文学賞を授与された。この間、数編の短編や、長編小説4部作『ヨゼフとその兄弟たち』（1933-43年）、あるいは各種の講演などを通してヒューマンズムの立場からファシズム、ナチズムを糾弾する。

ヒトラー政権が成立、独裁制が確立後、まずはスイスに亡命し、あちこち滞在を代えながら帰国の機会を伺う。第二次大戦の開始と同時に帰国を諦め、1938年アメリカへ亡命し、市民権を獲得し、プリンストン大学教授となりドイツ文学を講じる。ラジオを通して反ヒトラー演説を行う。かつドイツ人作家のアメリカへの亡命を援助する。

彼が最後の人文主義者、とりわけゲーテの最後の後継者と自負したことは前述した。彼は19世紀の都市貴族の精神を継承した作家である。しかしそこに宿っていた「政治的に庇護されていた内面性」を自己批判し、新しい人文主義の道を現代に再生しようとした。その頂点に立つのが、ドイツの敗戦が間近にせまった1945年ワシントンで行い、敗戦後ドイツの雑誌に掲載された「ドイツとドイツ人」である。その中で彼は、ドイツはルターの道ではなく、エラスムスの精神を引き継いだゲーテの道を歩むべきだったと告白したのである。

それが小説の形を取ったのが『ファウスト博士』である。作者は、古典学者ツアイトブロームに語り手を託し、天才的作曲家アードリアン・レヴァキューンの悲劇、最後には地獄へ落ちる生涯を語らせる。ニーチェの狂死した生涯をパロディに仕立てた問題作である。

なおこの作品と対称をなす小説『詐欺師フェリックス・クルルの告白』は、悲劇の世界には、ユーモア、笑いだけが唯一の幸せをもたらすものだと、作家の到達点を示す作品となるはずだった。フェリックス Felix = 幸せな、という名前を持つ詐欺師は日本にも上陸する予定だった。未完が惜しまれるばかりである。

## 人間中心主義の退潮 — 21世紀へ

ゲーテ、マンと継承されてきた人文主義の限界は第二次大戦後、1960年台初頭に出されたレイチェル＝カーソンの『沈黙の春』が先駆の書となって現代文明の反人間性を問い始めた。農薬などの化学薬品などが大地の生物を殺害し、ひいては地球規模で発生している気候変動を引き起こすという厳しい警鐘だった。

### 自然災害に思う

一方、核兵器、原子力発電所など、能率第一の科学への信仰が制御不能な事故を引き起こした。筆者は、東北大震災時の、農場に打ち捨てられた牛たちの重なりあった死体の光景を忘れることができない。これは人災事故である。決して自然災害ではない。大地震、津波は自然災害、だが原子力発電所の事故は人災であろう。

思い出す言葉がある。中村元さんが『日本人の思惟方法』（春秋社 普及版 2012年）の第二章「与えられた現実の容認」の中で詳述しているように、日本人の思惟方法は「環境世界ないし客観的諸条件をそのまま肯定しまうことである」という指摘は、我が国の風土と切り離せないものだろうか。

### 反原発のドイツ人女性

覚えておられる方もあろう。福島事故直後、日本で働いていたドイツ人たちが、早々に日本を離れ帰国したこと、またメルケル政権が原発の早期廃止を打ち出し、風力発電、ソーラー発電に力点を移したことを。

筆者は、2011年の秋、ドイツ見納めの旅と名付けて南ドイツを訪ねた。

車窓に展開される風景に多くのソーラーハウスが映った。新聞記事で知ったのだが、小さな町シェーナウに住むスラーデックさんは、チェルノブイリ事故（1986年4月）の後、電力会社を相手に一人で原発廃止運動に立ち上がり、嫌がらせや干渉に耐え、署名を集め、議会を動かし、町の半数以上の家にソーラーパネルを設置させることに成功した。彼女は胸のゼッケンに、Störfall（原発事故）と記していた。筆者は意を汲んで「お邪魔虫」とでも訳したい。

ドイツ人の親友、シュッカーは環境問題に取り組み、筆者と一緒に別府温泉を訪ね、温泉、阿蘇山を訪ねた時に、この火山活動のエネルギーを利用しない手はない、と力説し後日、資料を送って来た。

### 最後に笑うものは

人間、生物学的分類に拠る「ヒト」=ホモサピエンスは、類人猿の中の至高の存在であり、いまだそうした思想は支配的である。譬えてみれば、一種競技に秀でた者というより、十種競技を得意とする生物、とでも言えようか。だが AI という、ヒトが考案した技術が人間を支配し、人間を隷属させる時代が到来した。自然を自己の支配下に置きながら進化してきた人類、かつて「神の似姿」と自称した人間が、自然を絶滅させる状況を生み出した。

最近、山際寿一と小原克博、人類学者と神学者の対話『人類の起源、宗教の誕生』（平凡社）を読んだ。われら人類は、サルからホモサピエンスへと進化する過程で、かけがいのない資質を失ったのではないか、との問いが発せられていた。われわれは、時には動物園へ出かけ、ゴリラやチンパンジーたちから、集団で共生し生き残る知恵でも学ばなければならぬ。コロナ渦の最盛期の今、「ダーウィンが来た!」、「ワイルド・ライフ」など自然界の変化を追跡する報道番組が、地球規模での生物の危機を訴えていることは、必然のことである。

### 木野光司さんへ送る言葉

いつものように「木野さん」と呼び掛けることにします。長い間、本当にご苦労さまでした。本来なら、楽しい定年後の人生設計を思い描き、悠々自適の毎日を迎えるはずだったことでしょう。だが最後の年度に至るまで東京での公的な仕事、またドイツ文学・語学専攻の教室運営の中心的役割に専念されたことには、心が痛みました。また貴方は阪神ドイツ文学会の会長始め、まず数々の委員の重責を担い活躍されました。

2001年に、貴方が関西学院大学文学部に赴任される前から、ソフトボールの試合での貴方の俊敏な運動神経、あるいはテニスの切れ味鋭い左腕から

鎌田道生

繰り出されるサーブなど、筆者には及ばぬ技を見せてもらったことも強く記憶に残っています。

唯一、筆者が貴方に対して自慢できることは、烏鷲の争いにあっては筆者が師匠格であることです。コロナ禍が落ち着けば、AI的な囲碁ではなく、間違いながら着手を重ねるきわめて「人間的」な、お手合わせを実現できることを願っております。それも筆者の「三日天下」になるかも知れませんが。いろいろとお世話になりました。ご健康をお祈りいたします。

2021年 初秋 鎌田道生